



伝えゆく 平和の覚悟

【長崎市】その手記は「二人の母」というタイトルで始まっていた。〈あの一瞬の閃光が、私の全くあずかり知らぬところで、私の体内に受け継がれ、そして我が子の体内へと流れていたのです〉。被爆2世の古場久美子さん(70)＝総県副女性部長＝が、40年前につづったもの。当時の憤怒の表情が、行間からにじむ。(7月31日付)



【広島市中区】入道雲の湧き立つ空を見上げたたび、記者には一つの後悔が浮かぶ。それは、夏の暑い日に祖母が遠くを見てつぶやいた一言、「こんな日も死体を運んだな。触れてはいけない話だと思ひ、聞くのをためらった。やがて祖母が旅立った。残すべきはずの記憶が消えた思いがした。あの時、詳しく聞いていれば……。青春の後悔を胸に沈め、広島で記者となった。被爆3世として自分に何ができるのか。そんな思いを抱き、戦後の記憶をとどめる市営アパートの一室を訪ねた。竹内幸恵さん(93)＝女性部副部長＝がニッコリほ笑んでいた。(7月24日付)



墓に納めた四角いブローチ

許すまじ 核の爪

戦後80年

原爆が投下され80年が経過した。核兵器を正当化する狂気に対し、戸田先生は「その奥に隠されているところの爪をもぎ取りたい」と糾弾した。平和の王者である池田先生を先頭に、創価の師弟は「原水爆許すまじ」の大誓願を受け継いできた。広島、長崎の反核の叫びを伝える。(2次元コードから記事が読めます)



争いなき明日へ 幸せよ咲け

母よ 平和よ 師弟の空よ

【広島市安芸区】かけろうをつくる坂道の向こうに、広島原爆犠護ホーム「矢野おりづる園」がある。ここに約100人の被爆者が暮らす。カーテン越しに午後の光がゆらぐ一室に、その人はいた。園の中に静かな威厳をまとう河野良雄さん(93)＝副本部長。「せっかく来てもらうたんじゃから、題目三唱しましようかね」。その祈りは、初めて被爆体験を取材する記者に、何かを伝え託そうとする響きに思えた。(8月6日付)



【長崎市】福岡育ちの記者が、初めて「原爆」に触れたのは小学生の時だった。平和学習で訪れた広島平和記念資料館の展示室。黒い三輪車や衣服に胸がざわついた。同じ年頃の子どもたちの写真があった。こちらをじっと見ている気がした。息が詰まり、一人、展示室を出た。その日から戦争に悩めることが、どこか怖くなった。昨年、長崎支局に赴任した。想像できない苦しみを経験した被爆者が、慰問を通じ、生きる意味をどう変えてきたのか、知りたかった。戦争とは、自らに問いながら、中村ユキエさん(86)＝地区副女性部長＝を訪ねた。(8月9日付)



反核の咆哮 その胸に



地図に残る仕事。

大成建設グループ

大成建設 大成ロテック 大成有楽不動産 ビーエス・コンストラクション 大成ユレック 大成設備 成和リニューアルワークス 大成有楽不動産販売 大成建設ハウジング 佐藤秀 大成建設ICTソリューションズ

